

第 7 2 回 近畿地区大学建築系学科
卒業設計コンクール応募作品一覧

平成30年4月11日
日本建築学会近畿支部

No.	作 品 名	学生氏名	大 学・学 科	図面枚数
1	Tuvalu ー海上都市計画ー	湯浅 誠	成安造形大学 芸術学科	9
2	線でつなぐ景	林 将也	京都工芸繊維大学 デザイン・建築学科(建築Ⅰ)	12
3	祀りのために pour la fête ー誓いを祝う空間と、故人を偲ぶ空間ー	三浦 健	京都大学 建築学科	(A1)5 (A2)3
4	静けさの建築 ー木とコンクリートによる納骨空間と思索空間ー	長田 拓也	京都府立大学 環境デザイン学科	10
5	瑞雪のキャンパス ー雪の堆積場をキャンパスとしたアートプレイスー	宮崎 昂太	立命館大学 建築都市デザイン学科	8
6	駈け橋 (かけはし)	下原 紀子	帝塚山大学 居住空間デザイン学科	4
7	天へと向かう聖堂	吉村 陶子	武庫川女子大学 建築学科	8
8	未来への旅立ち ー知覧・万世の記憶を後世へー	北口 貴也	大阪工業大学 建築学科	9
9	オルタナティブなみんなの学校 ーこれからの学校空間に関する提案ー	向井 歩	奈良女子大学 住環境学科	9
10	street weaving	立石愛理沙	大阪市立大学 建築学科	5
11	流れの創出	武内 瑞穂	和歌山大学 環境システム学科	6
12	BIOLOGICAL ARCHITECTURE	堂地愛梨沙	大阪産業大学 建築・環境デザイン学科	3
13	オオスガノコレカラ	水野 智也	摂南大学 住環境デザイン学科	7
14	ぶどう荘	越智 誠	神戸大学 建築学科(建築デザイン)	13
15	アニメソッドのすゝめ 宮崎駿作品から考 える“動き”を生み出す小学校	畑崎 萌笑	関西大学 建築学科	10
16	Origin Market ー姫路市中央卸売市場における新たな提案ー	大恵あかり	兵庫県立大学 環境人間学科	6
17	門前の森	宗田 菜々	京都工芸繊維大学 デザイン・建築学科(建築Ⅱ)	6
18	LOOP ー小学生とともに作る新しい小学校の姿ー	宮本 順加	関西学院大学 都市政策学科	6
19	常なる「防」「興」 ー山津波に対する防災復興拠点施設ー	大西 花穂	京都女子大学 生活造形学科	6
20	クローブな関係から広がる町家コミュニティ	柚木 梨沙	大阪芸術大学 建築学科	10
21	つなぐ境界 ー米軍居住区と沖縄市街地を編むー	具志堅美菜子	神戸大学 建築学科(都市デザイン)	15
22	ぱらぱらと散って、滲んでいく	奥野裕美子	武庫川女子大学 生活環境学科	10
23	琵琶湖疏水のトポス	山田 一彰	大阪工業大学 空間デザイン学科	10
24	自営的地域モデル	中村 文哉	神戸芸術工科大学 環境・建築デザイン学科	9
25	護岸転成 ー現代における親水空間の再構築ー	円田 翔太	大阪大学 地球総合工学科	10
26	錦に住む ー市場で働く人のための住宅と 未来の受け皿となる空中通路ー	高橋 創	京都造形芸術大学 環境デザイン学科	3
27	九谷焼県外拠点としての入居型工房の提案 ー大阪市西区京町堀エリアをケーススタディとしてー	松江 美穂	滋賀県立大学 生活デザイン学科	2
28	境界を彩る小さな暮し	熊本 崇人	摂南大学 建築学科	8
29	観光の器、交通の器 ー水運の再興による観光地の循環化	吉田 亜矢	近畿大学 建築学科	7

(受付順) 以上29点<No. 欄に○印のものは入選作品>

日本建築学会近畿支部
平成29年度近畿地区大学建築系学科
卒業設計コンクール（第72回）審査報告

審査員長 平井 浩之

平成30年4月11日（水） 審査会場・大阪科学技術センター（6階600号室）

審査員長（互選） 平井 浩之
審査員（50音順） 大平 滋彦・岡田 泰典・神戸 嘉也・小牧 実豊・南浦 琢磨・宮本 雅弘
応募作品 29点（別紙参照）

審査経緯

審査員は設計事務所、ゼネコン設計部所属の計7名で構成され、厳正公平に審査をし、応募29作品から入選3点を選出した。力作も多く 選出は審査員の表が割れ僅差での審査で3次審査にまで及んだ。本年度はプレゼン手法が手書き風（CADでの手書き風ソフト含む）が増えたというのが 大きな印象であった。

1次審査として、審査員各自が全作品を審査し、各自6作品を選出した。集計の結果、本年度は満票を獲得した作品がなく、6票を獲得した作品が1点（No3）、5票を獲得した作品が2点（No21, 23）、4票を獲得した作品が3点（No5, 8, 14）、2票を獲得した作品が3点（No7, 16, 29）、1票を獲得した作品が8点、0票の作品が12点という結果で、この時点で、0票のものを落選とした。

2次審査として、1, 2票獲得作品について落選とするかを審査員が作品の前に集まり議論するスタイルで審査を進め、まずは、1票、2票獲得の作品（11作品）について、その作品を選出した審査員が選出理由を述べ、全員で審議した。

その結果 1票の作品、1点および2票の作品 計3点について 内容の討議により コンセプトおよび絵のうまさを審査員が評価し3次審査に進めることとした。

3次審査では 2次審査で繰り上げた3作品と、4～6票獲得した6作品を囲み、審査員が、作品1点ずつ全プレゼ資料を会場に広げ確認した。

多くの作品で、数枚の図面をつなげる形のプレゼ資料になっていることが判明した。

昨年度までとは 特に際立って違っていた特徴である。

改めて つないだ図面資料を基に審査員で論議を行った。一枚ずつめくっての審査では見えてこなかった作品の意図（力強いコンセプトと作品のつながり等）が見いだされ 熱のこもった論議が改めて起こった。

1次審査では見えなかった作品意図を9作品のそれぞれに対して 評価する点と残念な点を1作品ずつ審査員で討議した。その結果 それぞれの作品が1次審査では見えなかった意図を十分な時間をかけ論議し、その後 各審査員3点選ぶ形で投票したところ No21 6票 No5, 14が5票を獲得し 他の作品が3票以下となり、入選作品としてNo21、5、14を入選として選出することとした。

1次審査で6票獲得のNo3 5票獲得のNo23 4票獲得のNo8については 僅差の内容で票が伸ばせなかった。

No3は プレゼ技術が目を見張ったが 形態の美しさ・意図を図面に落としこむことのアピールが弱かったのか、建築形態の場所性と一步踏み込んだ提案が読み取れず入選を逃した。単色系のプレゼの中で 朱書きの図面部分が気になった。

No23 については 琵琶湖全体を使う視点の良さが興味を引いたが 単体の建築に踏み込んだ提案が見れなく入選を逃した。

No8 については 昨年同様 都市的 街づくり的なアプローチの作品が多い中、単体としてシーンの作りこみ 断面的な考察に非常に優れた作品であったものの 形態の新鮮さに関して 審査員の票を集められなかった。

入選した作品は、卒業設計らしく、しっかりとした調査や深い考察がなされた上で、各自の個性を作品に生き生きと表現し、図面のプレゼンテーション力もあり、完成度の高いものばかりであった。

今回、ページをつなげたプレゼ手法が目立ったが、設計意図を1枚の画面に落とし込み それがページをめくるごとに訴えるストーリー性も非常に重要なファクターであり 来年度に対し 審査基準の検討も必要かとの印象を受けた。

(平井)

審査概評

本年度も完成度の高い作品が多く、作者のレベルの高さに敬服しつつ審査に臨んだ。大学を代表する作品であるから当然なのかもしれないが、特にプレゼンテーションのレベルは我々の学生時代とは隔世の感がある。一方、審査においては、そのプレゼンテーションに惑わされず、設計者の発想とそこから導き出された建築との関係を重視して、丁寧に議論が重ねられたように感じる。卒業設計は作者が自ら敷地やプログラムを設定し回答するものであるが、入選された3点はともにその設定に作者それぞれの思い入れが読み取られ秀逸で、建築は場所の持つ記憶から導き出されるシナリオに沿って組み立てられ魅力的な仕上がりであった。他にも同等の評価を得ていた作品も複数あるレベルの高いコンクールであったが、最終的には個々の作品の有するオリジナリティが評価の分かれ目となった。

(宮本)

瑞雪のクレバス ー雪の堆積場をキャンバスとしたアートスペースー

宮崎 昂太君 (立命館大学)

モエレ沼公園に隣接した広大な敷地において、除雪で排出された雪を幾何学的地形に積み上げるランドアートと、雪を素材とする様々なアーティストの活動を、地域の観光資源としてゆくという壮大な試みである。イサムノグチの創りあげた造形への単なるオマージュではなく、豪雪地域における都市のゴミとなった雪を題材とすることによって、このプログラムが、かつてゴミの集積地であったモエレ沼公園の生い立ちへと繋がるとともに、都市問題の秀逸な解決策として、社会的価値を生み出している。

雪を積み上げてゆくために設けられた大きな擁壁は、2枚が雁行しながら向き合い、その間にある空に開かれたクレバス状の隙間は、建築のスケールを超えた空間として、唯一無二の魅力を生み出している。擁壁に付加されたアーティストィックな様々な仕掛けと、その背後にある雪の圧倒的な存在に包まれることによって、訪れる人々は、雪に対する新たな知覚と、大きな感動を抱くに違いない。

(大平)

ぶどう荘

越智 誠君（神戸大学）

コミュニティーの喪失という課題に対して提案された、多様な関係性によって育まれる新しい生活の場。敷地は開発から取り残され未だ葡萄畑の残るニュータウンの一角。テーマ設定は明快である。そのうえでこの作品を一層魅力的にしているのは、かつての関係性をリセットされた「個人」が「葡萄」という媒体と関わることによって、緩やかに束ねられてゆくというストーリーである。この「ぶどう荘」を囲む葡萄畑は、誕生した新しいコミュニティーを守る砦のようにもみえる。

透明感のあるドローイングは詩的で美しい。映画のワンシーンの様に切り取られた生活の情景全てが、建築の全体性もまた想起させる深さを有している。

個別のテーマ設定は現実的であり、環境、農業、ワークスタイルの変化まで多岐にわたっている。しかし散漫になることなく建築として包括され、徹底して描かれたパブリックスペースに表現されている。興味深い秀作である。

（宮本）

つなぐ境界 ～米軍居住区と沖縄市街地を編む～

具志堅美菜子君（神戸大学）

沖縄で育った作者は、小さいころから米軍基地との共存について長年、懸案を頂いていた。建築を学び、そこで得たスキルをもってその懸案を解決し、社会に問題提起していききたいという非常に“力のこもった”作品である。

米軍基地というと攻撃的で近寄りたくないイメージが一般的だが、作者はそこに住む米兵家族と沖縄県民の生活の融和を願ったのである。着眼点は、沖縄の街と基地を無機質に切り分けた、まっすぐ直線に延びる境界フェンス。これに違和感と疑念をもちながら成長してきたことが、発想の原点であろう。

作品は、無機質で直線的な境界フェンスの代りに、両方から利用できる小学校などを配置したものである。そして双方の生活の「交わり」を創りたいという発想が“かたち”としてストレートに感じ取れる。直線ではなく幾多の曲線を用いて、「交わることで何か新たなものを生み出し、成長していく」印象が強く受け止められる。曲線状の校舎の間には、人々が共存し、交流しあうイメージを和やかな風合いで、ダイナミックかつ繊細に表現している。作者が求めるものが、手に取るように感じとれる表現力は評価に値する。

また、基地返還後の将来の建物のイメージも想定している。「密」な曲線状の建物が、変換後には「粗」になり、境界フェンスがなくなった両側からも使われる機能へと変わっていくプログラムもこの作品の重要なポイントである。これは作者の将来を見据えた最終的な「夢」であろう。さらに、米軍基地跡の将来利用のイメージやビジョンがあれば、提案により強い説得力があっただろう。将来、作者が社会へ出て更なる計画スキルを得たとき、これを実現してくれることを望みたい。

（南浦）